

解題

1 はじめに

明治学院大学図書館には、明治学院初代総理を務めた J. C. ヘボン (James Curtis Hepburn, 1815-1911) による「ヘボン自筆ノート」が所蔵されている。その存在は、すでに鷺山 (1927) に次のように記されている。

今学院にはその第一版及びヘボン氏の手記になる原稿が昔のまゝに残されて居るが、何れも永遠に保存尊重すべきものである。(p.94)

「ヘボン自筆ノート」の大きさは縦 32.8cm×横 18.8cm の皮装丁のノート一冊本で、321 葉からなる¹。巻頭にヘボンによるサインがあり、『和英語林集成』初版 (以下、1867 年刊を初版、1872 年刊を再版、1886 年刊を 3 版とする) の編纂に先だつ「手稿²」と、ローマ字表記による日本語訳の 'Matai den fuku-in sho.' (「マタイ伝福音書³」, 以下、「マタイ伝」とする) とからなる。文字はブルーブラックインクで書かれたが、歳月により青色染料は消え、インク本来の鉄錆色の発色となり、さらに裏写りが生じている⁴。

「手稿」部分は、250 葉 499 ページ分に、アルファベット順で A の部の Aa から、K の部の Kane, ru, ta までの見出し語 6,736 語を収録し、それに対する語義などが記されている (木村 (2005))。なお、Kane, ru, ta に続く見出し語を収録した「手稿」の存在は不明である (499 ページというきりの良さで終わることからも続きがあるのではなかろうか)。見出し語はローマ字表記と対応する漢字表記で示されるが、見出し語「Iuyo szru 猶豫」に「ユウ」と記される以外、ひらがな・カタカナは用いられていない。この漢字表記は左から右へと書き進めるいわゆる左横書きとなっている。見開きの右面を主に使用し、左面の多くは、右面の語の補足やその後に収録した見出し語の記載に用いられている (そのために白紙部分もある)。全体を通してペンで記されているが、その他に鉛筆書きと、漢字表記に関しては細い墨書きが混在する⁵。また、品詞表示や語義・用例が、英語とローマ字表記による日本語によって記されている。

先学の研究として、高谷 (1959)、渡辺 (1968) があり、また松村 (1966) が「A の部」を中心として解説を加えた上で、全体の構成などについて概略を述べている。ただし、見出し語の収録語数などについては触れられていない。成立年は、「手稿」に記載がなく不明である。

1 縦 32.0cm×横 16.0cm で、フルスクラップ版の紙をもとにしていると考えられる。

2 その内容はいわば「草稿」というべきものであるが、明治学院大学図書館では『和英語林集成』「手稿」という名のもとに所蔵している。

3 ローマ字聖書は *SHIN-YAKU SEI-SHO. YOHANNE NO FUKU-IN.* (1873) はじめ刊行されている。

4 明治学院大学図書館元次長 松岡良樹氏による。

5 判読不能の見出し語、一箇所に複数の見出し語が記されているもの、用例との区別が判然としないものなどがある。それらの扱いによって、若干の増減の可能性がある。

6 松村 (1966)。なお、筆記具の相違による内容上の特質 (例えば、墨書きの漢字表記が、特定の辞書からの援用といった可能性など) は見受けられないように思われる。一例として、墨書きは「Fushe 布施」から「Futskiai 不附合」にかけての漢字表記に多く見られる (写真 p.11)。全体にわたり、見出し語と語義の間に漢字表記のためのスペースを確保している。

7 松村 (1966) には、「いつごろの段階での草稿であろうか。高谷道男氏は、これをいちおう 1864 年 (元治元年) ごろのものとして記しているのであるが、あるいは、それよりややさかのぼった時期のものかとも考えられる。」とある。その後の高谷・太田 (1981) では「ヘボンが成仏寺で書いていた原稿の一部を、桐の箱に入れて、明治学院では大事にしていました。」と記す。成仏寺にヘボンが滞在したのは、来日直後の 1859 年 10 月 22 日から、1862 年 12 月 29 日に横浜居留地 39 番地へ転居するまでである。

様々な資料を参照していると考えられるが、特に、構成をはじめ、イエズス会宣教師によってあらわされた『日葡辞書』（1603-1604）の影響は否定できない。

「マタイ伝」は、「手稿」に引き続き、36葉の右面のみ使用しているため、36ページ分にあたる。はじめに‘Matai den fuku-in sho.’とあり、第1章から第12章からなる。第13章はDai jū-san shōとあるのみで終わっている。「マタイ伝」は全28章からなるため、やはり「手稿」同様途中までである。

その成立年については鈴木（2009）によりいくつかの根拠が示されている。まず、インクの変色の程度から「手稿」の後に書かれたものと考えられる。また、‘Ni wa no suzume wa issen nite urazaran ya (2羽の雀は一銭にて売らざらんや)’と貨幣単位として「銭」が用いられているのは、1871年の新貨幣条例を受けてのものであろう（下線は筆者）。ローマ字綴りについても「ス」・「ズ」を書き表すに当たり、全体としてはsz, dzuが主であるが、dzもみえる。また、szからsuへ、dzuからzuへと修正を施してある部分もある。sz・dzは1867年の初版で、sz・dzuは1872年の再版で、su・zuは1886年の3版で用いられる綴りである。

あわせて1870年に日本人教師として奥野昌綱（1823-1910）が翻訳原稿執筆のため雇われる。奥野が版下を書いた木版刷りの『新約聖書馬太傳』が1873年に出版されている。これは前年のヘボンとS. R. ブラウン（Samuel Robbins Brown, 1810-1880）共訳『新約聖書馬可傳』『新約聖書約翰傳』に続くものである。以上の事由から「マタイ伝」の部分は1871年前後にかけてあらわされた可能性が高い。

その後、右面1ページ分を使用して、‘Mr. Sarda’s Estimates for building the Church in Ōnoechō-rokuchōme’¹⁰とある予算書が載る。

2 ローマ字綴りについて

現代でもよく知られるヘボン式ローマ字の祖形が「手稿」によって確認できる。「手稿」という性格上、当然のことかもしれないが、ローマ字綴りにはゆれがあり、整然とした一貫性に欠ける。方針の模索や認識の推移のようなものに加え、緊張感の不足、無意識のあらわれといったことも混在しているようである。また、使用頻度を考慮しなければ「手稿」には初版の綴りがほぼ内包されているが、初版には見受けられないアクセント符号も散見する。

「手稿」が作成されたであろう時期の前後に刊行された資料との比較を行おうとすれば、まずヘボンとさまざまな面で行動をとるS. R. ブラウンによる『会話日本語』（*Colloquial Japanese*・1863・以下、『ブラウン』）は欠くことができない。また、J. リギンズ（John Liggins, 1829-1912）の『英日日常語句集』（*Familiar Phrases in English and Romanized Japanese*・1860・以下、『リギンズ』）のローマ字綴りは、19世紀の来日宣教師の中ではきわめて初期のものとして位置付けられるため、参照しなければならないだろう。さらに初版を加えて、変化の顕著な部分（シ、ス、セ、チ、ツ、ジ、ズ、ゼ、ヂ、ヅ、撥音）を挙げると次の〔表1〕のようになる。¹¹

8 再版に「銭」の見出し語が収録される。

9 しばらく後に修正されたものかもしれない。

10 指路教会が山手から尾上町6丁目に移転したのは1892年である。すでに1890年に土地を買い入れている（横浜指路教会創立百周年記念事業実行委員会編（1974）・横浜指路教会一二五年史編纂委員会編（2004））

11 昭和女子大学近代文学研究室（1959）に、『リギンズ』と初版のローマ字綴りの対照表がある。なお、杉本（1989）を中心に、『リギンズ』は金子（1999）、『ブラウン』は加藤・倉島（1998）も用いて、一部追加を行った。清音・濁音・拗音・撥音・促音・長音、またアクセント符号などの全体については木村（2008）にある。

〔表1〕ローマ字対照表（抜粋）

| | リギンズ | 手稿 | ブラウン | 初版 | | リギンズ | 手稿 | ブラウン | 初版 | | リギンズ | 手稿 | ブラウン | 初版 |
|----|-------------------|--------------------------|-----------------------|-------------------|---|---------|-------------------------|----------|-----|---|----------------|----------------|------|----|
| シ | shi, sh | shi, sh', sh | shi, sh', sh | shi, sh' | ス | su, s | sz, s', s | sz, s' | sz | セ | she, se | she, se | se | se |
| チ | chi, ch | chi, ch' | chi | chi | ツ | tsu, ts | tsz, ts', ts, tz | tsz, ts' | tsz | テ | te | te | te | te |
| ジ | ji, zhi | ji, j | ji | ji | ズ | zu | dz, zz | dz | dz | ゼ | je, zhe | je, ze | ze | ze |
| ヂ | ji, zhi | di, gi, ji | ji | ji | ヅ | dzu | dz | dz | dz | デ | de | de | de | de |
| 撥音 | n, m (b, m, p 混在) | n, m (b, m, p 混在) | n, ng, m (b, m, p 後接) | n, m (b, m, p 後接) | | | | | | | | | | |

※ 「手稿」で複数の綴りが用いられている際には網掛けで示した。

※ 複数の綴りが用いられているもので、特に使用率の高いものについては、書体をかえて（かつ太字で）示した。

※ 「手稿」を軸に資料間で同一のもの・類似のものは枠の下を太い破線で示した。

※ 『ブラウン』の撥音のngはローマ字対照表には見えないものの、会話例の中には見られないようである。

※ 『リギンズ』と「手稿」の撥音の「m (b, m, p 混在)」とは、両唇音b, m, pが後接する場合、mのみならずnも用いていることを示す。

先行研究の一つ杉本（1985）には「ウィリアムズ、リギンズ、ブラウン、ヘボンなどは相互に影響しあっていると考えるべきであろう。」(p.197)とある。また、『リギンズ』の序文にはS. W. ウィリアムズ (Samuel Wells Williams, 1812-1884)¹²の名が挙がる。S. W. ウィリアムズとはヘボンとW. M. ラウリー (Walter Macon Lowrie, 1819-1847) が1843年にマカオ滞在時に居を共にしており、S. W. ウィリアムズの綴りを基底とした『リギンズ』のローマ字綴りは、来日間もないヘボンにとって頼りになるものであったはずである。そのために一部の異なりはあるものの、ひとまず『リギンズ』のローマ字綴りを援用した可能性は大きいと考えられる。なお、S. W. ウィリアムズ、リギンズ、ブラウン、ヘボンは英語圏の出身者であり、中国・日本に在留経験のある（来華・来日）宣教師という共通項を持つともいえるか。また、杉本（1989）に、

右の（筆者注：『リギンズ』、『ブラウン』、初版のローマ字綴りの対照表）を比較してみると、あきらかにリギンズにヘボン式ローマ字の原型があるといってよく、リギンズ→ブラウンへと受け継がれ、ヘボンへと流れて、定着している点も了承できるであろう。(p.236)

とあるように、刊行年から明確なことではあるが、次のような順になることを確認しておく。

『リギンズ』→『ブラウン』→初版

『リギンズ』の綴りには、『ブラウン』よりも「手稿」のものが一層の類似性を見出すことができる。そこで、

12 Samuel Wells Williams のことである。

13 『リギンズ』のPREFACEに次のようにある。

The mode of Romanizing these syllables adopted here, is that recommended by Dr. S. Wells Williams; with the exception that *ji* is used instead of *zhi*, and generally *je*, instead of *zhe*.

また、重久（1941）のリギンズのローマ字綴りに関して言及している箇所を引用する。

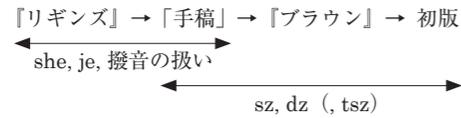
彼（筆者注：リギンズのこと）の採用した羅馬字綴りは英語式であり、所謂ヘボン式羅馬字綴法の先驅をなすものであるが、このLigginsが日本語を轉寫するに方つて用ゐた羅馬字綴法ははゞ Dr. S. Wells Williams の推薦した方式によつたと記してをることに注意しなければならない。(p.291)

さらに、C. R. レブシウスによる綴りと米国海外伝道局とのかかわりになる。

14 ブラウンのP. ベルツ氏宛（1860年12月31日付）書簡には、S. W. ウィリアムズが聖書の翻訳原稿とともに、ポルトガル語、ラテン語、オランダ語、英語で書かれた他の書籍多数を貸し与えてくれた旨が記されている。

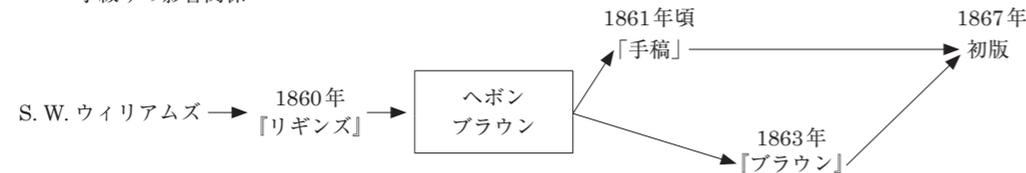
渡辺（1968）と杉本（1985）に加えて、「手稿」の調査を総合すると（『日葡辞書』とのかかわりは置くとして）、次のように位置づけることができ、〔図1〕のようにさらになめらかなつながりが想定できる。

〔図1〕特徴的な綴りの影響関係



「手稿」は、ヘボンとブラウンのさまざまな事柄の連動を考慮すると、〔図2〕のように、1859年10月のヘボン来日後から1861年頃にかけて、きわめて短期間に連続して作成されたものではないかと考えられる¹⁵。その後、初版に向けて、辞書としての検索に耐えうる整合性のあるローマ字綴りの体系が構築されていくことになったのであろう。

〔図2〕ローマ字綴りの影響関係



3 収録語の扱い

「手稿」からは語句の抹消、訂正、鉛筆による加筆等が読み取れ、ヘボンがどのような辞書作りを志向していたかをたどることができる。また、この「手稿」にヘボンは手を加え1867年の初版に至っているため、「手稿」には多くの未整理事項が含まれている。初版に至る途上の「手稿」について、具体的な諸例には誤りを含むものもあるがここではそのままに記し、見出し語、品詞表示、語義・用例、英語・日本語からの見解、文法とスペリングに関してから特徴を述べることにする。

見出し語

日常生活、施療活動、読書からえたものをはじめ、収録されたことばは和語、漢語、外来語、混種語とさまざまである。中にはBibiri, ru, ta（びびり）、Doyomi, mu（どよむ）、Dzbu nure, ru（ずぶぬれる）、Dzrike-ochi, ru（ずりけおちる）といったきわめて日常的なもの、またGasats na shoobai（がさつな商売）といった句によるものも含まれている。

〔表2〕に、「手稿」と初版の見出し語数を示した。「左」「右」は、「手稿」の左面と右面のことである。見出し語数は、「手稿」が6,736語であり、初版の該当する部分は6,686語で、50語の差しかない。ところが、「手稿」と初版の間で、共通している見出し語は約四分の三である。約四分の一にあたる見出し

15 先にも記したが松村（1966）では、1864年をさかのぼると推定し、関連する内容の書簡の当該箇所（1861年4月17日付、1862年2月24日付、1864年11月28日付）を挙げる。渡辺（1968）では1863年以前と推定する。
 16 ローマ字綴りが変化しているため、「手稿」の収録状況にあわせ、Yū-の48語、Ze-の83語、Kaye-の19語、Kaze-の3語、K'wa-の63語を該当する初版の各部の見出し語数に加えた。なお、6,686語は、初版の「和英の部」の32.2%にあたる。

語が削除され、代わりに新たな約四分の一の見出し語が増補されている。削除された見出し語は、重複して収録されているもの、初版で用例に差し替えられたもの、漢語などである。増補されたものは、主として基本的な和語やその活用形、複合語などである。

「手稿」には、清濁のゆれやローマ字綴りの異なりなどからページを隔てて重複して収録される同一の見出し語、また、ごく一部であるが、語義がなく見出し語のみのもの、見出し語や語義が取り消し線など（翻字凡例（p.8）で削除されているもの、見出し語の先頭に疑問符‘?’が付されるもの、品詞を示す略号が記されているものなどがある。

自立語の活用語については、活用形を示し（語根（連用形）、現在形（連体（終止）形）、過去形（連用形+た））、『日葡辞書』を髣髴させる。

漢字表記については江戸後期の漢字表記辞書とも言える『雅俗幼学新書』（1855）を参照している（木村（2005））。「Amemboo 條糖」、「Bikutsku 搗搦」、「Bukubuku 水圍戯」、「Dara·dara 慢々地」といった近世中国語由来の漢字表記も見いだせる。その理由として、中国に滞在したことのある日本語初期習得者ほど、日本は中国と同じ漢字文化圏であると即断し、漢字・漢語の中日での差異を意識することなく、中国で見聞きした漢字・漢語は、（位相はなく）ユニバーサルであるといった認識を持つ面が濃厚であったと考えられる。このような誤解が生じるのは、当時の日本の辞書に近世中国語由来の漢字表記が収録されていることが後押ししてもいいと言えよう。しかし、その後の日本語習得の過程で、熟字訓や国字といった日本独自のものや日本で一般的なものの存在を理解し、漢字表記に関しても次第に改められていく。

あわせて、漢字表記には不安定な部分が多く見受けられる。例えば、「Ii. 能: 宣」は「宣」、「Homerare, ru, ta. 彼譽」は「被譽」、「Horashime, ru. 掘便」は「掘使」とあるべきところである（下線は筆者）。また、「Jook'shen. | | 般」は「蒸気船」、「Chakusen. | 般」は「著船」である。偏や旁が同一で字形が類似しているためにこのようなことが生じたのであろう（日本人による助力がなかったものと思われる）。

品詞表示

それぞれの略語についての詳細は示されていないが、品詞表示が見られる。初版のABBREVIATIONAS（略号）へとつながるものでもある。以下は、品詞や活用形を表示した例である。

Ikidoori (n). 憤 anger.

Ikidoori, ru, oota. 憤 to be angry, ~~displeased~~: to rage, rave,

また、自動詞、他動詞の区別および、その活用形を示している例もみえる。

Hajiki, ku, iita. 弾 (t. v). to fillip, ~~sudden~~ jerk suddenly or spring, to slip off (as water

(from an only surfaces)

yubi wo hajiku - to fillip. *soroban wo 〃* - to move the balls of the abacus

midz wo 〃 - to shoot off water (as an only surfaces)

Hajike, ru, ta (i. v) 罅發 to spring burst open, to split open (as ripe fruit). to fly back,

さらに、細かく見出し語を品詞や語義の違いに注目して分類しているものもある。

17 その後の刊行に向けて辞書としての規範を提示していくことになる。刊行の過程において、手稿がどの段階のものなのかを知るために、誤りや現代との異なりに対する評価、そして位置づけは重要である。

Hajimari, ru, atta. 始, 初 to be begun, commenced,

yomi·hajimuru,

Hajimari (n). 始 the beginning

Hajime, ru, ta. 始 to begin, commence

hajimete miru - to see for the first time,

yomi hajimeru

Hajime (n). the beginning.

〃 *no* - 〃 *to shte*

〃 *ori* -

Hajimete. adv. first time

〃 *o me ni kakaru*

語義・用例

「手稿」の中には初版に至る過渡的なものや誤りと考えられるものがあるが、初版にみえる方針への萌芽ととらえることができる部分も少なくない。

(1) 手稿での対応

- ・複数の語義や用例

Dan. 檀 a step, an altar in a budhist temple,

agaridan - a ladder. *Butsdan* -

kaku dan no chigai - a vast difference in rank,

Hari, ru, tta. 張 to spread out, extend, expand, stretch, develop,

貼 to display, to open out, to strike. to paste 貼

yumi wo - to draw a bow,

kami wo 〃 - to paper. *ita wo haru* - to board, *ami wo* 〃 to spread a net,

ki wo 〃 - to be liberal, *ni ga hatta* - the goods are too many. *ne ga haru* - too high in price

nori nite haru - to paste with paste

ito wo 〃 - to stretch out a line, *omote wo* 〃 - to make a good show,

iji wo haru - to embolden. *na yoku hatta* - the vegetable have grown well.

gakumon wo haru - to show learning, *sheken wo* 〃 - to make a display.

- ・同音異義語 (アクセント符号による発音の¹⁸区別)

Hashi 橋 a bridge *hashi bushin szru* - to construct a bridge

itabashi, dobashi - *hashi wo kakeru* - to construct a bridge.

Hashi 箸 chopsticks

〃 *wo mots* - to hold 〃 . *hashi de hasamu* - to take with 〃

Hashi. the bill of a bird, *kuchibashi* - 〃

Hashi 端 the end, termination, border, edge, side; point of subject

yama no 〃 the end border of a mountain. *michi no* 〃 - side end of a road,

- ・日本の宗教, 文化・文物, 制度の説明

Amida. 阿彌陀 Budha.

namu·amida·buts - called the *rokuji no miyoogo*. constantly

by repeated by the Buddhist priests in their prayers.

Fuchi. 扶持 rations in rice, paid to officials,

ichinin fuchi - rations for one man,. 5 *goo* each day for a man, 3 *goo* for woman.

Fude. 筆 a pencil, pen,

fude no jiku, - the handle of a pen

Hik'yaku 飛脚 a postman, courier.

- ・文学作品からの引用

Ayedz. cannot, (neg. suff.)

不敢 *iki mo tskiyedz* - could not get breath

toriyedz - at once, immediately. laying aside other employment.

Yoshisane wa kiki ayedz kuratsbo ni kōbi wo sage

Yoshisane on hearing immediately bowed his head on the pommel of the saddle.

※『南総里見八犬伝』第1回「義実(きま)は聞(き)あへず、鞍(くら)坪(つぼ)に頭(かう)を低(さげ)。」からの引用。Imijikuにも

Yoshi Sane imijiku mōshitari とある。その他の文学作品などからの引用もある。

(2) 初版との比較

- ・「手稿」では見出し語のみで語義のないもの (以下, → の後は初版)

Fukusz'ke (語義なし)

→ **FUKUSZKE**, フクスケ, 福助, *n.* A person of short stature and large head, a dwarf.

- ・「手稿」と初版とが同じ語義のもの

Fuszma 襖 a sliding screen, covered with wall paper, 紙門

also bed clothes.

→ **FUSZMA**, フスマ, 衾, *n.* Sliding screens covered with wall paper, also, a bed quilt.

- ・「手稿」と初版で語義が異なるもの

Fukujiyu 服従. submit subject, allegiance

→ **FUKUJŪ**, -szru, フクジウ, 服従, (*tszki sh'tagau*). To follow, adhere to, obey, (as a teacher).

- ・「手稿」で理解の助けのため挿絵を加えたもの (p.263, 436 の2例・翻字および p.263 については写真 p.12)

Hanetsurube. 拮榘 a swinging well bucket,. (on a pole )

→ **HANE-TSZRUBE**, ハ子ツルベ, 拮榘, *n.* A well bucket swung on the end of a pole. (挿絵なし)

- ・初版で事物などの理解を変更したもの

Choosaiboo. kind of toy,

→ **CHŌ-SAI-BŌ**, テウサイバウ, *n.* A fool, dunce. *H'to wo chōsaibō ni szru*, to make a fool of a person.

Hitatare. 直垂 a garment worn under armor,

→ **HITATARE**, ヒタタレ, 直垂, *n.* A kind of robe worn by nobles.

- ・初版で, 語源を加えたもの

Akanomidz 阿伽水. water offered or placed at the graves,

→ **AKA**, アカ, 阿伽, *n.* The water placed by the Buddhists before their idols, and in the hollow places cut in tomb stones. - *kudzru*, to offer up water. (This word is not Japanese, but a

18 アクセント符号は初版では用いられていない。

Pali word introduced by the Buddhists; its resemblance to the Lat. aqua is striking.

英語・日本語からの見解

英語の観点から日本語の解説をさまざまな方法で行っている。その一例を挙げる。

(1) 語法 (否定形, 仮定法, 使役態, 受動態)

Akaranu. (neg of *akuru*). cannot be opened.
same as *akanu*

Araneba. (sub. neg of *Aru*)
Araneba naranu - must have.

Horashi, szru. (caust of *Horu*) to make another dig, order to dig.

Kamare, ru, ta. (pass of *kamu*). to be bitten.

(2) 接尾辞 (suffix.)

Bara. a plural suffix.
wakatono bara - young cavaliers

Dani. a suffix., only, besides, merely: even.
nani kotaen kotoba dani naku - had not even a word of answer reply

oto dani shedz - not even a sound

死

sareba gi ni yotte shi wo damo jishezaru

(3) 位相差

Abayo. (interj.). salutation on parting - used by children

Aogi-koinegau. | 冀 most respectfully & earnestly pray.

Chin 朕 I, me (used only by the *Mikado*)

Gake a colloquial suffix.

kayeri gake when returning,

sammaigake - three fold, three sheets,

roosoku natsgake - candle made in summer,

Gui 愚意 my opinion (humble).¹⁹ my foolish judgment

Gumai | 味 me, I (humble).

Haigan 拜顔 to meet, to see. (respectful).

Heshitsukeru. (*Yedo oppeshi tskeru*). 壓 to mash, crush

(4) コロケーション

Cha (*chiya*). 茶 tea.

cha wo nomu -

cha wo ireru - to make tea, *cha wo niru* to boil tea.

cha wo shedzuru senjiru - to boil tea, *cha wo tateru* - to make tea from the powdered tea.

cha wo iru - to fire tea, *cha wo hiku* - to powder tea for market,

cha wo tsmu - to pluck gather tea. *cha wo sheiszru* - to prepare tea leaves

19 respectful と humble については、古田 (1974) では再版を挙げ、「へボン は humble と honor を、動詞まで及ぼして考えることはなかったと考えられる。」とある。

cha wo tsmeru - to pack tea in boxes. *cha wo furumoo* - to serve

out tea at an entertainment, *cha wo tashimu* - to be an amateur tea maker

cha wo sonaeru - to offer tea to idols.

(5) 成句・格言

Hinniyo ittoo. the mite of a poor woman (more acceptable to *Kami* (*chooja no mandoo yori*) than the abundant offerings of the rich

→ † **HIN-NIYO**, ヒンニヨ, 貧女, (*madzshiki onna.*) A poor woman. *Chō-ja no man-dō yori hinniyo no-ittō*, the one light (offered to the *kami*) of a poor woman is better than ten thousand offered by a rich man.

(6) オノマトペ

Boribori (adv) a crackling noise - as when any thing dry & hard is eaten.

→ **BORI-BORI-TO**, ボリボリト, coll. *adv.* The sound of craunching, or crushing any hard substance with the teeth. *Inu ga - hone wo kamu*, the dog is gnawing a bone. - *nedzmi ga nani ka kūte iru*, what is the rat gnawing at?

Dzki-dzki itamu. a throbbing pain

岑々痛

→ **DZKI-DZKI**, -*itamu*, ズキズキイタム, 炸衝痛. To throb with pain.

Fuwari to 浮 gently & lightly, airily, buoyant & floating, spongy,

〴 *tonde kuru*, - to sail along as a hawk,

〵 *ochiru* - to fall gently,

→ **FUWARI-TO**, フワリト, *adv.* In a light and airy manner, buoyantly, spongy. - *tonde kuru*, to come buoyantly, sailing (as a bird).

Gorogoro 殷雷 the noise, as of thunder., wagon rolling, rumbling noise.

→ **GORO-GORO**, ゴロゴロ, *adv.* The sound of rumbling, or rolling as of thunder, or a waggon. *Kami nari ga - to naru*, the thunder rolls.

文法とスペリングに関して

文法やスペリングにおいて現代と異なるものがある。当時の様相を含めて精査する必要があり、それぞれに理由があったり、にわかには誤りと判断したりすることができないものも含まれている。そもそも草稿段階のため、誤りといったような表現は適切ではなく、句読法とともに思考の流れを示しているものもあろう。しかし、辞書として規範や検索のための一貫性が求められる初版に至る過程で、どのように調整がなされたのかを知りうる手がかりになると考え、次にそのいくつかを挙げる。

(1) 文法

・ 不定冠詞

a heir a honor a iron stand

・ 動詞

I have take this much out (完了形 taken)

to not form a correct mid, opinion (否定の不定詞 not to)

to make to splash (使役の後の原形 make splash)

day will opened (原形 open)

(2) スペリング

colour, theatre のように英式のもの、reflection のように米式のものが見られる。また、次のようなミススペリングと思われるものが散見する（一部を挙げる・左側が「手稿」）。

| | | | | | |
|----------|---|-----------|---------|---|----------|
| clense | → | cleanse | declair | → | declare |
| hul | → | hull | lizzard | → | lizard |
| rehersal | → | rehearsal | steping | → | stepping |
| Tykuns | → | Tycoon | warf | → | wharf |

多くは単純な書き誤りと思われるものであるが、Budh, Budhism, Budhist は一貫して異なる。綴りに不安を覚えたのか、(?) を付した語もあり、この段階では、例えば、N. ウェブスター (Noah Webster, 1758-1843) などによる英語辞書やスペリング・ブックといったものを確認していなかったのではないかと考えられる。

4. まとめ

日本語を精密に聞き取り整理した「手稿」は、日本語研究資料として、また日本語辞書、和英・英和辞書のみならず近代的な辞書の範とも言える『和英語林集成』のルーツとして、現存することの意義、またその果たした役割はきわめて大きい。ヘボンの和英辞書作りの目的は初版の PREFACE に記されている通り、日本語の習得のためである。その目的と意図はすでに「手稿」にあらわれている。

あわせて、几帳面に書かれた文字とその記載内容や推敲過程から、ヘボンという人物の性格の一面がうかがうことができるとともに、日本語への取り組みの姿勢、『和英語林集成』の編纂過程を知りうる貴重な資料となる。

先にも記したが、全体の 7 割弱を収録していることになる Kane, ru, ta 以降の存在は不明である。また、恐らく「手稿」に先後する内容を持つものがあつたはずである。先行するものとして考えられるのは、例えば採集したことをカード化したようなもの、後行するものにはより精密さを増しカタカナも付されている入稿直前の原稿といったものの存在が想像される。

では、なぜ「手稿」が存在しているのか。その理由については、後部に記された「マタイ伝」によるためではないかとも考えられる。それは、初版刊行以後にノートの後部を「マタイ伝」の記載に用いたことで、ノートの役割が「手稿」から「マタイ伝」にシフトしながらも、ノートとしての必要性が継続したためと考えられる（一方、「マタイ伝」の第 13 章以降の存在についても問題になるところである）。

いずれにせよ、このような草稿段階のものが現存していること自体が奇跡である。見出しの Aa から Kane, ru, ta までしか存在しないのは事実であるが、それしか「無い」のではなく、それが「有る」ととらえるべきである。

「ヘボン自筆ノート」は、刊行された初版（横浜版・ロンドン版）、再版（縮約ニューヨーク版と縮約上海版を含む）、3 版（縮約丸善版を含む）の祖となるものである。そのために日本語学、英語学、中国語学のみならず、近代日本の歴史、政治、経済、社会、文化・文明、また風俗・習慣、さらにはそれらにともなう制度を知る上でも有用な側面を持っている。「ヘボン自筆ノート」は、ヘボン、『和英語林集成』、ローマ字綴り、明治学院の関係をあらためて、さらに強く深く結び付ける存在なのである。

参考文献

石川潔編 (1999) 『ドクトル・ヘボン関連年表』 私家版
 海老澤有道 (1964) 『日本の聖書－聖書和訳の歴史－』 日本基督教団出版部 (講談社学術文庫版 (1989) を用いた)
 大江満 (2000) 『宣教師ウイリアムズの伝道と生涯－幕末・明治米国聖公会の軌跡－』 刀水書房
 大島智夫 (1996) 「ヘボン『和英語林集成』の背景」『MICS オケイジョナル・ペーパー』 1
 岡部一興編 高谷道男・有地美子訳 (2009) 『ヘボン在日書簡全集』 教文館
 加藤知己・倉島節尚 (1998) 『幕末の日本語研究 S. R. ブラウン 会話日本語－複製と翻訳・研究－』 三省堂
 金子弘 (1999) 「リギンズのローマ字転写法と三つ仮名表記」『日本語日本文学』 9
 金子弘 (2000) 「ウィリアムズのローマ字表記」『日本語日本文学』 10
 亀井孝解題 (1970) 『J. C. ヘボン著 和英語林集成〔再版〕 復刻版』 東洋文庫
 木村一 (2005) 「『和英語林集成』「原稿」が依拠した一書－『雅俗幼学新書』との関わり－」『日本語の研究』 1-2 (『国語学』 通巻 221)
 木村一 (2008) 「『和英語林集成』「手稿」のローマ字綴りとその位置」『近代語研究』 14 近代語学会編 武蔵野書院
 木村一解題 (2013) 『美國 平文先生編譯『和英語林集成』 復刻版』 明治学院発行・雄松堂刊行
 W. E. グリフィス著・高谷道男監修・佐々木晃訳 (1991) 『ヘボン－同時代人の見た－』 教文館 (*Hepburn of Japan* (1913) の翻訳)
 小島義郎・竹林滋・中尾啓介編 (2001) 『ルミナス和英辞典』 研究社
 杉本つとむ (1985) 『日本英語文化史の研究』 八坂書房
 杉本つとむ (1989) 『西洋人の日本語発見－外国人の日本語研究史 1549～1868－』 創拓社
 杉本つとむ (1998-1999) 『杉本つとむ著作選集』 (全 10 巻) 八坂書房
 鈴木進 (2009) 「J. C. ヘボン訳ローマ字 *Matai den fuku-in sho* 草稿」『MICS オケイジョナル・ペーパー』 10
 重久篤太郎 (1941) 『日本近世英学史』 教育図書株式会社
 昭和女子大学近代文学研究室 (1959) 『近代文学研究叢書』 12
 高谷道男 (1954) 『ドクトル・ヘボン』 牧野書店
 高谷道男 (1955) *The Letters of Dr. J. C. Hepburn* 東信書房
 高谷道男編訳 (1959) 『ヘボン書簡集』 岩波書店
 高谷道男編訳 (1976) 『ヘボンの手紙』 有隣堂
 高谷道男・太田愛人 (1981) 『横浜バンド史話』 築地書館
 高谷道男 (1992) 「近代日本の開眼者ヘボン－平文先生とわたくし－」『よこはま かながわ 心の旅路』 有隣堂
 常盤智子 (2004) 「J・リギンズ『英和日用句集』の成立過程－『南山俗語考』との関連を中心に－」『国語と国文学』 81-10 (通号 971)
 中島耕二・辻直人・大西晴樹 (2003) 『長老・改革教会来日宣教師事典』 新教出版社
 原豊 (2003) 『ヘボン塾に連なる人々－高橋是清から藤原義江まで－』 明治学院サービス
 飛田良文・李漢燮 (2001) 『ヘボン著和英語林集成初版・再版・三版対照総索引』 1～3 港の人

- 古田東朔（1974）「アストンの敬語研究－人称との関連について－」『国語学』96
- 松井栄一（1973）「辞書における品詞表示」『品詞別 日本文法講座 10 品詞論の周辺』明治書院
- 松岡良樹（2007）「ヘボンの『和英語林集成』から」『徬書月刊』4
- 松村明・飛田良文解説（1966）『J. C. HEPBURN 和英語林集成 復刻版』北辰
- 松村明解説（1974）『和英語林集成〔第3版〕 復刻版』講談社
- 村上文昭（2003）『ヘボン物語－明治文化の中のヘボン像－』教文館
- 望月洋子（1987）『ヘボンの生涯と日本語』新潮社
- 森岡健二（1991）『改訂 近代語の成立－語彙編－』明治書院
- 横浜指路教会創立百周年記念事業実行委員会編（1974）『指路教会百年の歩み』日本基督教団横浜指路教会
- 横浜指路教会一二五年史編纂委員会編（2004）『横浜指路教会百二十五年史』通史篇・資料篇 日本基督教団横浜指路教会
- 横浜プロテスタント史研究会（2009）『横浜開港と宣教師たち－伝道とミッション・スクール－』有隣堂
- 鷺山弟三郎（1927）『明治學院五十年史』明治學院
- 渡辺実（1968）「日本語の近代化に尽した人々 5 J・C・ヘボンの人と業績」『言語生活』200

あとがき

刊行に至る道のりは、多くの方々のお力添えに導かれたもので、偶然では済まずことのできない深くありがたい縁を感じる。

「手稿」を取める「ヘボン自筆ノート」は、明治学院大学名誉教授 高谷道男先生と杉本民三郎元総主事によって、第二次世界大戦中に焼失をまぬがれるためヘボンの手紙とともに仙台の東北学院に移されている（高谷・太田（1981）、高谷（1992）など）。

本書の「手稿」の翻字は、共同研究のもとに行ってきたが、木村が見出し語の索引を作成しており、その後全体の翻字を進めていた。時を同じくして翻字を取りまとめていた鈴木と出会い、双方で判読することになった。

それぞれが判読したものを持ちより、ひとつのデータファイルに集約しながら進めたのであるが、499 ページにわたる分量に加え、判読し難いものが多く、一度に解決することはできなかった。何度も入力データのプリントアウトを往来しながら、読み取ることでできた前後の部分とのつながりから分からない点の一つずつ解きほぐしていった。

もとにした画像は数十年前に撮影されたモノクロのマイクロフィルムからのコピーであったため、細部などがはっきりせず、折に触れて実物の「手稿」で確認を行った。2012 年に入り、図らずも明治学院大学図書館から、最新技術によって撮影したばかりの精細画像を使用させていただいた。これによって、不明箇所判読が飛躍的に進んだことはたいへんにありがたいことであった。

それでも、全体を通しての解読は困難を極め、現在でも不明箇所を残すこととなったが、できるところまで行った結果であると受け止めている。

解題は、日本語学や書誌の観点から木村が執筆したものと、英語学の面からの知見をもとに記した鈴木のものとの組み合わせた。

明治学院創立 150 周年に、期せずして本書を刊行することができた。

明治学院学院長 大西晴樹先生、明治学院大学図書館、原豊氏、松岡良樹氏に、心からお礼申し上げる。そして、この種の出版が厳しい現状で、刊行を方向づけてくださった三省堂には感謝に堪えない。

『和英語林集成』初版（1867）の PREFACE の冒頭に次のようにある。

In introducing this Dictionary to the public the author feels no small degree of diffidence.

この気構えを受け、全力を傾注したつもりであるが、不備な点があることを懼れる。

御批正と御教示をお願いする次第である。

2013 年 4 月 12 日

木村 一・鈴木 進